

ヘルスツーリズム研究会 講演内容まとめ

— 特定非営利活動法人日本ヘルスツーリズム振興機構 —

(発表日 第4回研究会 2006年5月17日)

1. 講演タイトル: 鹿教湯温泉 30年の取り組みについて

2. 所属機関および発表者名: 鹿教湯温泉 観光協会 宣伝部長 斎藤宗治

3. 講演概要 ※記述はフォントサイズ(MS P明朝・11サイズ/50文字×30行以内、「である」調)をお願いします。

国内旅行の形態が団体から個人へ、歓楽から保養へ推移しつつあり、温泉地・旅館は営業形態の転換を迫られている。温泉の利用のされ方も多様化しており、その一つの方向として、保養・療養型の温泉地を目指す動きが見られるようになってきている。しかし、その具体的な商品づくりや提供プログラムの開発などはまだまだ試行錯誤の段階にあり、どのような商品が市場に受け入れられるのかテスト段階にある。

信州・鹿教湯温泉では30年にわたって一貫して健康保養温泉地作りに取り組んできた。鹿教湯温泉病院を中心に、地元農家を対象とし、健康指導や運動指導を組み込んだ7泊8日の「保養旅行」商品を開発。30年間で、延べ200万人が参加するというヒット商品となった。その他、運動指導のためトレーナーを雇用したり、クアハウスの導入、散策道の整備などを積極的に行って、全国随一の保養温泉地となる。保養温泉地として一定の成果を挙げている。

一方、保養温泉地として注目はされているものの、入湯客は減少の傾向にある。原因は、保養・療養に特化しているため「高齢者の行く温泉」というイメージが定着し、あたらしい顧客の開拓に失敗している。今後の重要な顧客層である団塊の世代の新しい滞在の需要には答えきれていない。

そのため、鹿教湯温泉のモデルをそのまま全国の温泉地に適用することはできない。やはり鹿教湯温泉も新しいプログラムや商品開発を迫られていると言ってよい。

そういった状況を背景に2年前よりJTBと市の援助を受けて、「里山のパッセジャータ」という企画に取り組んでいる。パッセジャータとはイタリア語で「散策・散歩」という意味であるが、そのイメージには人と人とが交流するといった意味をあわせもっている。里山の温泉地で散策を楽しみながら、地元住民と滞在客が交流できるような温泉地が今後の鹿教湯温泉が目指す方向となる。

鹿教湯の取り組みが新しい保養・療養・滞在型の需要に答えられるかどうかはわからない。いづれにしても、試行錯誤、テスト・検証を繰り返すなかで保養・滞在型の需要を探っていく必要がある。そういった意味でもヘルスツーリズム研究会の今後の取り組みについては注目し期待している。新しい市場を開拓し、先進的な事例として今後の旅行のモデルとなるような旅行を提案・開拓することを願っている。

※参考図表・写真等はこの枠内に貼り付けてくださいますようお願いいたします。